

第8回大阪教区典礼研修会

神様からの百万本のバラ

教皇ベネディクト十六世 使徒的勧告『愛の秘跡』からミサを学ぶ

2011年10月30日(日) 於: サクラファミリア 小田武彦

1 愛の秘跡である 聖体 (the Holy Eucharist) は、イエス・キリストがご自身を与えた たまものです。イエス・キリストは「友のために自分のいのちを捨て」(ヨハネ15・13) しました。この驚くべき秘跡はこの「大きな愛」を示します。イエスは十字架上でわたしたちのために死ぬ前に、手ぬぐいを腰にまとい、弟子たちの足を洗いました。同じように、イエスは 聖体の秘跡 (the sacrament of the Eucharist) の中でわたしたちを「この上なく」愛し続けます。イエスは ご自分のからだを血を わたしたちにお与えになるからです。

5 聖体において、神自身の「アガペー (愛)」は からだをとって わたしたちのもとに来ます。それは、神が わたしたちのうちで、わたしたちを通して働き続けるためです。

11 「わたしの記念としてこのように行いなさい」(ルカ22・19、一コリント11・25)。イエスはこう命じることによって、イエスが与えたたまものにこたえ、それを秘跡として現存させるようにとわたしたちに求めます。主は、主のいけにえ によって生まれた教会が、このたまものを受け、聖霊の導きのもとに秘跡の典礼の形を発展させることを期待するのです。聖体はわたしたちを、イエスの自己奉獻のわざへと引き寄せます。わたしたちは、「ロゴス(みことば)」であるイエスの自己奉獻の動きに導き入れられるのです。この過程は、究極的には、全世界が造り変えられ、神がすべてにおいてすべてとなられることを目指します(一コリント15・28 参照)。

12 霊のわざを通じて、キリストご自身が、教会の生きた中心である聖体から出発しながら、教会の中に ともにいて、働き続けるのです。

36 ヒッポの偉大な司教アウグスチヌスは、とくに聖体の神秘に言及しながら、キリストがわたしたちをご自身と同じものにするのを強調します。「主キリストは、ご自分のからだを血をわたしたちに ゆだねることを望みました。これらを ふさわしい しかたで受けるなら、あなたがた自身が、受けたものとなります」。それゆえ、「わたしたちはキリスト教徒となっただけでなく、キリストとなった」のです。

44 信仰は、神のことばを聞くことによって生まれ、強められます(ローマ10・17 参照)。聖体において、肉となった みことばは、自らをわたしたちに霊的な糧として与えます。こうして「教会は、神のことばの食卓とキリストのからだの食卓という、二つの食卓から、いのちのパンを受け、またそれを信者に与えます」。

45 典礼における神のことばの朗読を、よく準備した朗読者が行うように注意を払ってください。「聖書が教会で朗読されるときには、神ご自身がその民に語られ、キリストは、ご自身のことばのうちに現存して福音を告げられる」ということを忘れてはなりません。実際、わたしたちが朗読し、受け入れることばは、肉となったみことばです(ヨハネ1・14 参照)。キリストは、今、語っておられます。わたしたちは神のことばを知り、学ぶこと

によって、より優れたしかたで感謝の祭儀を尊び、祝い、生きることができるようになります。「聖書を知らないことは、キリストを知らないことである」。

47 (供えものの奉納という)つつましく単純な行為は、実際にはきわめて重大な意味をもっています。わたしたちが祭壇にパンとぶどう酒を運ぶことによって、あがない主であるキリストは全被造物を受け取り、造り変えて、父にささげます。こうしてわたしたちもまた、世のあらゆる苦難と苦しみを祭壇にささげます。

49 感謝の祭儀は本来、平和の秘跡です。聖体の神秘のこの側面は、ミサの平和のあいさつで特別に表現されます。紛争の恐怖に覆われた現代にあって、平和のあいさつには特別な意味があります。教会は、これまでもまして、平和と、教会と人類という家族全体の一致のたまものをたえず主に祈り求めなければならないからです。

51 古代において「ミサ(missa)」は単純に「退堂」を意味しました。しかしながら、キリスト教的な用法において、このことばは次第に深い意味をもつようになりました。「退堂」は「派遣」を意味するようになったのです。短い閉祭のあいさつのことばは、教会の宣教的な性格を簡潔に表します。

52 第二バチカン公会議は、神の民全体が感謝の祭儀に行動的で、充実した、実り豊かなしかたで参加することを強調しました。「参加」ということばは、祭儀の中での単なる外的活動を指すだけではないことをはっきりさせる必要があります。わたしたちが祝う神秘と、その日常生活との関係とを、深く自覚することから出発しなければなりません。『典礼憲章』は、信者が感謝の祭儀に「無関係な、あるいは無言の傍観者として」参加するのではなく、「聖なる行為に、意識的に、敬虔に、また行動的に」参加するよう勧めます。信者は「神のことばをもって教えられ、主のからだの食卓において養われ、神に感謝をささげ、ただ司祭の手を通してばかりでなく、信者も司祭とともに汚れなきいけにえを奉獻して、自分自身をささげることがを学び、こうして、キリストを仲介者として、日々神との一致と相互の一致の完成に向かうように全力を傾注しているのである」。

55 信者は、教会生活全体に積極的に参加しようと努力しなければ、聖なる神秘への「行動的参加」はありえないことを知らなければなりません。教会への参加には、社会にキリストの愛をもたらす宣教の務めが含まれます。

58 健康上または高齢のために礼拝が行われる場所に行けない人に思いを致しながら、わたしは、教会共同体全体が、在宅または入院中の病者を霊的に支援することの司牧的重要性に関心をもつことを望みます。

76 交わりは、神との交わりであると同時に、兄弟姉妹との交わりです。「わたしたちの間の交わりが経験されていなければ、三位一体の神との交わりは、生きたものにも、真実のものにもなることができません」。

79 信徒はいっそう強く望まなければなりません。聖体がますます深く日常生活に影響を与え、自分たちが職場や社会全体の中で説得力のある証人となることができるように。男と女の愛、いのちへと開かれた態度、そして子どもの教育は、聖体が生活を造り変え、生活に完全な意味を与える力を示す、特別な場です。

88 感謝の祭儀が ささげられるたびに、十字架につけられた主が、わたしたちのため、また全世界のために ご自分のいのちによってささげた たまものが、秘跡の形で現れます。こうして聖体の神秘は 隣人への愛の奉仕を生み出します。「わたしは、わたしが好きでない人や、わたしが知らない人でさえも、神のうちに、また神とともに、愛するからです。このような愛は、内的な意味で神と出会うことによるのみ可能です。内的な意味で神と出会うことにより、わたしたちは ものの感じ方までも含めて、神と共通の意志を抱くに至るからです。そこからわたしは、人を自分の目や感情を通してだけでなく、イエス・キリストの目で見ようようになります」。聖体は、キリストを信じるすべての人が、他の人々のために「裂かれたパン」となり、より公正で兄弟愛に満ちた世界を作ろうと努めるよう駆り立てます。まことにわたしたちは皆、イエスとともに、全世界のいのちのために裂かれたパンとなるよう招かれています。

89 「わたしはキリストを独り占めすることはできません。わたしは、キリストのものとなったすべての人、あるいはこれからキリストのものとなるすべての人と一致することによって、初めてキリストに属する者となることができるのです」。正義と和解とゆるしの回復が、真の意味での平和を築くための条件であることは いうまでもありません。このことを認めることによって、不正な社会構造を変革し、人間の尊厳に対する尊重を回復しようとする決意が生まれます。こうした責務が実行されることを通じて、聖体は生活の中で、感謝の祭儀が意味するものとなります。教会は正義のための戦いを傍観していることはできませんし、傍観するべきでもありません。平和と正義のまことの推進者となってください。「感謝の祭儀にあずかる人は皆、現代世界において平和を作る努力をしなければなりません。

91 わたしたちはミサの中でいつも繰り返して祈ります。「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください」。ですからわたしたちは、国際機関、国、民間機関と協力しながら、飢餓や栄養失調の問題をなくし、少なくとも軽減するために、できるかぎりのことをしなければなりません。現代世界、とくに発展途上国では、何百万の人が飢餓と栄養失調で苦しんでいるからです。

92 聖体の霊性は、社会構造をも変えることのできる大きな力をもっています。こうした聖体の霊性を育てるために、自分たちがこの感謝を、被造物全体を代表して、世の聖化を望み、世の聖化のために熱心に働きながら行うのだということを自覚しなければなりません。

※標題『愛の秘跡』「解説」(教皇ベネディクト十六世 2007年3月18日)

キリストは、聖体によって、わたしたちに「ご自分の」愛を与えることを望まれました。この愛に促されて、キリストは十字架上でわたしたちのために いのちをささげました。最後の晩餐のとき、イエスは弟子たちの足を洗うことにより、わたしたちに愛のおきてを残しました。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」(ヨハネ 13・34)。しかしこのことが可能となるために、わたしたちは ぶどうの木の枝のようにイエスとつながっていなければなりません(ヨハネ 15・1-8 参照)。だからイエスは、わたしたちがイエスのうちに とどまることができるように、聖体のうちに わたしたちの間に とどまることを選ばれました。ですから、わたしたちがイエスのからだと血によって信仰を養うとき、イエスの愛がわたしたちに注がれ、わたしたちも兄弟のために いのちをささげることができるようになります(一ヨハネ 3・16 参照)。